大東文化大学経済論集　87－2，2006.7

ペティと『国富論』

馬　場　宏　二

問題

ウィリアム・ペティ（1623～1687）とアダム・スミス（1723～1790）を繋ぐ試みは、既に何回か行なわれて来た[1]。ペティの理論的貢献が認知された後となれば、経済学史として当然必要になる作業だった。ところがそれは簡単には成功しなかった。両者の文面を直接に対比する素朴な試みもあったが[2]、これは類推をつまみ食い的に示したにとどまる。シュムペーター(1883～1950)は『経済分析の歴史』[3]の中で、ペティ→カンティロン(1680？～1734？）→ケネー（1694～1774）→スミスの系譜を示しているが、これは数量によって経済を表現する計量経済学の視点から整理した流れであって、形式的関連付けに過ぎない。近年、アスプロムールゴス[4]は労働配分と剰余の、はるかに実質的な対概念の発展として、ペティ→カンティロン→ケネー→スチュアート（1712～1780）→スミスの流れを描き出し、これはかなり成功したものと見得るが、これはこれで、ペティ～スミスの関連がいささか複雑になる上に、スミス価値論は果たしてペティ労働価値説の正統の嫡子か、という問題を残すように思われる。

経済学の歴史をここまで面倒にした主因はスミスのペティ無視にある。スミスは『国富論』[5]で、ペティの名を一遍も挙げなかった。そればかりか、ペティの著作名を挙げたこともなく、明らかにペティの影響を受けたと解し得る命題や文章も、それと判る形では残さなかった。また、スミスが遺した蔵書（以下、アダム・スミス文庫ASL[6]と記す）にもペティ自身の著書は含まれない。外形的には、スミスはペティの存在を全く知らなかったかに見える。実際にそうなら、二人の巨匠が一世紀を隔てて独立に経済学を構築し、後世はその異同に振り回されているだけだ、ということになり、スミスは先学を見過ごした怠慢を責められこそすれ、道義的責任は免れる。だが、事実はそうではない。スミスはペティという人物の存在を知っていた。そしてペティの学問的成果についても、少なくとも政

治算術という概念の形成者であることは知っていたはずである。それなのにペティを『国富論』に登場させなかったばかりか、政治算術に否定的な評言を加えることで、ペティの貢献を矮小化した。あるいはスミスは、ペティを意図的に消そうとしたのか？無論、一筋縄では行かないスミスが相手である。明快な解答が得られるとは期待できない。だがこの問題は、いささかは詮索して見るに値する謎である。

1．スミスの手紙

1977年に編集された『スミス書簡集』(7)の中に、ペティの名を挙げた手紙が一つだけある。シェルバーン伯爵に宛てたもので、主題はその息子、スミスが指導していたエドモンド・フィッツモーリスに関わる。ひとまず、要約的に紹介する。1759年4月4日付け。計1,500語ほどの、結構長い手紙である。

冒頭に、前言を違えて手紙を遅らせたことへの弁明がある。軽度の気鬱と思わぬ出来事による用事とが重なって、手紙を書いている時間も気力もなかったと言うのである。まさに『道徳感情論』が出版された時点のことなのだが、それを明示する叙述はない。続いて本題の、フィッツモーリスを指導した件を述べる。

これによるとスミスは、プランを示してフィッツモーリスに聴講科目や聴講期間を細かく指示している。論理学、道徳哲学、ギリシャ語等諸言語、歴史、法学、市民法、数学に言及している。夏休み期間についても、フランス語、ダンス、フェンシングを習い、それと別に、（下宿させていたのだろう）毎朝自分と一緒に二・三時間、ギリシャ語、ラテン語、フランス語の道徳哲学の名著を読ませると、かなり熱心な指導ぶりである。若者の金の出し入れについても、細かく厳しく監督している模様が記されている。そこで言う。彼は50ポンドを残してくれたから、この点では特にご報告すべきことはない。宗教的にもきちんとしていた。

その上で、今年夏にスコットランドでお目にかかれれば、息子さんの成長ぶりがご覧になれることでもあり、とても嬉しいと付け加えている。

われわれの探索にとっては、これに続く最後のパラグラフが重要である。いわく、貴卿がアイルランドで行なわれた高貴で寛大なお仕事はこちらでも良く知られている。スコットランドでも、領地が東海岸から西海岸まで達するような貴族が何人かいる。彼らは土地

改良者と自称し、地元民にそう呼ばせている。だが、お屋敷の周り二・三百エーカーほどを耕すだけで、残りの土地を無人のまま全く改良せず、百エーカー1シリングにも価しない荒蕪地にしておくのは、神や自国や子孫の望みに応えようとしないことであり、馬鹿げていると同様恥ずべき怠惰である。聞くところでは、貴卿はそうしたご意見ではなく、御領地の村々が優雅で偉大になるよう気を配っておられるが、工芸や産業を、いままで知らなかった貧しい地方に導入する試みが、もっと高貴で重要な義務だとは考えておられない。「私はしばしば夢見ることですが、貴卿の名誉ある御先祖サー・ウィリアム・ペティを喜ばせるのに、子孫が彼自身の構想に適した計画を追求する以上のことはありません」。

因に名宛人のシェルバーン伯爵二世はペティの娘アンの孫に当たり、後に大資産継承者ランズダウン侯爵一世になった人物。エドモンド・フィッツモーリスは多分その次男で、政治家・歴史家となり、おそらく、『サー・ウィリアム・ペティの生涯』という伝記を書いた人物である（ODNBによる）。

どうやらスミスは、シェルバーン伯から、グラスゴー大学に入学した息子の教育を依頼されていたようだが、シェルバーン伯がペティの子孫であることも、ペティが大土地所有者でありかつ経済的開発者であることも熟知していた。ここで奇妙なのは、そのペティがいくつかの著作の著者であり、丁度一世紀先行する先駆的経済学者であったことに全く触れていないことである。無論、この手紙を書いた時点では、スミスは道徳哲学者として立ったばかりであり、経済学を深めて行くのはこの後のことだから、経済学者ペティをあまり強く意識していなかったとしても無理はない。しかしペティは、実業的実践と同時並行的に、『租税貢納論』『アイルランドの政治的解剖』『政治算術』[8]を代表とする、いくつかの経済学的著作を表わしており、それらは18世紀前半までは学問的影響力を維持していた。自ら処女作を書き上げたばかりのスミスが、ペテイの著書について全く無知だったとか無関心だったと推測するのは、逆にいささか不自然である。

松川七郎は、「スミスがペティに深い尊敬の念をいだいていた」ことを示す手紙を書いた[9]と紹介している。その手紙とは上記のものに他ならないが、それは、土地改良家・実業家としてのペティへの尊敬を示しているものの、学者としてのペティを尊敬した文章ではなく、松川が強調するような、スミスがアメリカ独立に共感していたために独立支持派ホイッグの首領だったランズダウン侯爵を尊敬したと言う趣旨のものでもない。この紹介

は、松川がペティの遺稿探索のためにランズダウン家を訪ねた訪問記の中に含まれるので、あたかもスミスが先輩学者ペティを尊敬した文であるかのごとき錯覚を導くおそれがあるが、そうした趣旨は全く含まない。

スミスは、ペティという人物は充分承知していた。著作家としてのペティやその学問的成果をどこまで知っていたか。その痕跡は極めて希薄である。『国富論』について探って見よう。

2.『国富論』のペティ

繰り返しになるが、『国富論』[10]にはペティの名は出てこない。ペティの著作も引用されていない。少なくともスミス自ら書いた文章の範囲では、ペティという人物はこの世に存在しない。スミス自ら見ているはずの『国富論』第3版[11]にある索引も同様で、ペティの痕跡もない。

われわれが今日利用する『国富論』諸版にペティの名が出てくる時があるが、それは1970年代まで標準版だった、1904年刊のキャナン版[12]に、編者キャナン（1861～1935）が付した編者註においてである。それは二ヶ所ある。

第一。『国富論』第1編第8章「労働の賃金について」中の、キャナン版小見出し「北アメリカはイングランドよりもいっそう盛大である」相当箇所に付せられた編者註の(1)。「北アメリカのブリテン植民地では人口は20年ないし25年で倍加する」という趣旨の本文に対して、ペティが、イギリスでは360年で倍加すると述べていると、『政治算術』を挙げたもの[13]である。この編者註にはなお、関連してチャールズ・ダヴィナント(1656～1714)、グレゴリー・キング（1648～1712)、リチャード・プライス（1723～1791）の名も挙げられているが、取り急ぎ、キャナンはさらに、フランクリンを挙げるべきだったとだけ指摘しておく。

第二。『国富論』第2編第2章「社会の總資材の特殊部門と考えられる貨幣について、すなわち、国民資本の維持費について」の中の、キャナン版小見出し「貨幣の量は全生産物に対しては小さな割合しか占めていないが云々」相当箇所。流通通貨の総量は年々の生産物価値に対してどのような割合を占めるかは決められない。さまざまな著者によって、5分の1, 10分の1, 30分の1と算定されている、という趣旨の本文[14]にたいして、ペティは『賢

者には一言をもって足る』[15]では所得4,000万ポンド鑄貨600万ポンド,キングは所得43,500万ポンドに対して鑄貨11.5百万ポンドとしている、と補った註である。

いずれにせよ、以上のキャナンの編者註はあまり有意なものではない。第一の編者註は、アメリカの人口倍増期間が20～25年であるとするスミスの命題に対して、対比的に、ペティによればイギリスでは360年だ、としただけである。しかも、その出典は、おそらく、1670年代に書かれ1690年に息子の手で出版された、著書としての『政治算術』でなく、1680年代初めに書かれ、版を重ねた小冊子『政治算術別論』[16]ではないかと推測される。この書は各版異同が大変難しいものなので、キャナンが正しい場合があり得るが、倍増年数という概念や360年という数値は、管見の範囲では「別論」の方が明示的である。のみならず、スミスの本文にあった、アメリカでは人口は20～25年で倍増するという命題は、ベンジャミン・フランクリン（1706～1790）の『人類増殖に関する考察』[17]に含まれる。この文献はスミスの蔵書ASLにはないが、スミスとフランクリンの交友関係[18]を考えると、スミスがどこかでこの文献を読んだか口頭で聞いたか、いずれにせよフランクリンから知識を得た可能性が高い。これはキャナンの編者註で当然拾うべき範囲に属する文献だから、それを挙げなかったのは、キャナンの文献知識が不十分だったことを示す一例にもなる。

第二の編者註はもっと意味が軽い。そもそも本文のスミスは、年生産額と鑄貨量の比率は決められないとした上で、決められない例証として、多くの著者がさまざまな数値を挙げたと言っただけなのである。5分の1にしろ30分の1にしろ単なる例示に過ぎず、その典拠を探すことなど殆ど意味はない。しかもキャナンが紹介したペティの数値は7分の1弱、キングのそれは4分の1だから、スミスの例示にさえ合わない。

一般にはキャナンの編集自体は大変な力作である。数多くの編者註はスミスの事実誤認や資料操作の誤りを示してくれるし、隠された典拠の指摘にもなり、後世のスミス研究にさまざまな示唆を与える。そればかりか、キャナンは小見出しをつけて全体を読み易くし、索引もスミス自ら付したものを編者註によって補充した。しかし、キャナンがもともと理論家であって学説史家ではなく、たまたまグラースゴー大学におけるスミスの講義のノートを入手し、これを出版するために典拠の考証を行なったところから『国富論』の出典考証に入った（ODNB）ことから来る弱点も持っていた。考証は一般には愚直で小姑的と言えるほど細かく律儀に行なわれ、関連文献が煩瑣なほど挙げられる一方で、筆者ごときが

見ても、なぜこれを落としたのか疑わしいことさえある。上記のフランクリンも一例だが、ヘンリー・マーチン（1665～1721）の『東インド貿易の諸考察』[19]もそうで、スミスの典拠捜しをするのであれば、比較生産費説、富の概念、上記の生産と鑄貨の比率論などはこの書に求めて良かったし、分業論ではむしろマーチンの方が上だと言うことは、マカロック[20]とマルクス[21]が異口同音に指摘していた。貧富の格差をマーチンがアメリカ原住民について指摘したところを、スミスはアフリカについて言い換えたのではないかとする「連想」[22]もある。というわけで、愚直なほど律儀な考証家キャナンが二ヶ所で挙げたからといって、ペティがそのままスミスの内在的先駆だと見ることはできない。

とは言え、ペティとスミスの内的紐帯を暗示する経路はキャナンの考証には尽きない。端的に言えば、スミスにとってのキーワードである「富」の概念にしても、ペティ由来を疑うことが出来る。富という語は、キャナンの索引に拠れば『国富論』全体で20回以上出てくるが、その中で、スミス自身の概念として明確なのは、社会の年々の生産物である消費財―「必需品・便益品・享楽品」―の意味であり、この意味で明示的に８回は述べられる[23]が、その大部分は「土地と労働の生産物」と表現されている[24]。そこからペティ『租税貢納論』にある有名な命題「土地が富の母であるように労働は富の父である」[25]を想起することは容易であろう。つまり、スミスは機軸概念の形成において実はペティに依拠していたのではないか？名を隠蔽して理論は盗用したのではないか？

むろんこれは単に疑い得るだけである。何も書いてないのだから、スミス自身の着想だったとも、ペティ以外の先学に依拠したとも、ペティから誰かを迂回して受容したとも言える。多様な可能性があるが、ペティからの直接的盗用の可能性もゼロにはなし得ない。特にスミスが「商業についてのもっともすぐれたイングランドの著作家たちのうちの何人かは、一国の富はその国の金銀だけでなく、その国の土地家屋、あらゆる種類の消費財であると述べつつ論をはじめる」、ところが論を進めるうちに消費財は落ちて富は金銀だけになると論ずる[26]時、彼がペティの、金銀宝石はいついかなる時でも富、葡萄酒・穀物・肉類はその場限りの富とする富二本立て説[27]と、重商主義学説の富・貴金属説とを観念的に繋いだと想定すると、極めて解かりやすくなる。スミスはペティの富概念を直接に知っていた？後に述べるように、「富」はスミスの書名あるいはスチュアートに対する独自性の内的主張とも関わるだけに、ペティとの可能的関連が目立つし、読者としても重視して

おいて良いところである。

この種の概念上の関連は他にもなお疑い得るであろう。といってもそれら全てに拘わると議論に纏まりが着かなくなる。そこで、別種の経路を見るために、スミスの読書範囲および政治算術、政治経済学といったキーワードを、もうすこし探って見る必要がある。節を改めよう。

3．スミスの読書範囲から

スミスがペティの学問を知っていたか否かを調べるには、スミスが読んだ文献に言及があるか否かを見ると良い。スミスが読んだことが明らかな文献にペティの学問が明示されていれば、スミスは不注意でか怠慢でか意図的にか、『国富論』でペティを無視したことになる。無論そうした作業を完全に行なうことは出来ないしその必要もない。まず、スミス自ら何らかの形で読んだことを示している文献から適当と思われるものを選んで探れば良い。その種の文献のうち、ここで取り上げるに値するのは、フランス百科全書、ケイムズ『人類史のスケッチ』、ダヴィナント著作集、そしてヒュームの諸著であろう。

フランス百科全書[28]は、『国富論』の中で明示的に引用されているわけではなく、アダムスミス文庫ASLに含まれているわけでもないが、スミスがこれに注目していたことは、『エディンバラ・レヴュー』誌同人への手紙[29]から明らかである。キャナンは『国富論』第一章の分業論に対してこの百科全書の影響があることを示唆しているが、実際その通りであろう。

問題はこの大辞典にペティが登場することである。それも、あろうことか「政治算術」の説明においてである。すなわち、Arithmétiqueの項の中にArithmétique Politiqueの小項があり、その説明の初めに、この学問はLe chevalerie Petty Angloisすなわちイギリスのサー・ペティによって始められたとあり、ダヴィナントへの言及もある。スミスはこの項を読まなかったのだろうか？はっきり読んだと見做し得る記録は見出せないが、早くから百科全書に注目し紹介もし、いくつかの点で影響を受けていたスミスが、『国富論』の中で「政治算術」の語を二度は使った。しかもその一方には、次節で見るように、かなり微妙な評言を加えている。そのスミスが、フランス百科全書の「政治算術」の記述を全く読まなかったとはいささか考え難い。なおこのフランス百科全書は、次の「政治算術」ならびにそ

の次の「政治経済学」の節でも登場する。

ケイムズ卿（ヘンリー・ホーム）の『人類史のスケッチ』[30]は、『国富論』第５編第２章第２節の租税論で、スミス自ら有名な租税四原則と関わって引用したばかりか、キャナンが計三つの論点—ハムバーグの理想的納税、高率関税は密輸を増やし税収を削減する、スペインの内国消費税の害悪—について、典拠の補強として挙げている[31]。それゆえこの書第二巻の社会論＝政府論の末尾に纏められている財政論は、次のダヴィナントの著作とともに、スミスが財政論で整然たる構成を示した際の有力な手がかりになったものと思われる。そこで筆者は、あるいはペティ『租税貢納論』への言及がありはしないかと考えて同書のリプリント版[32]を瞥見したが、ダヴィナントが繰り返し現れ、ロックも登場するものの、ペティは登場しない。また、スミスの四原則はケイムズでは六原則である。財政論においては、ペティがスミスの源流と確認はできそうにない。

ダヴィナント著作集。『国富論』では、二ヶ所でダヴィナントに直接言及している。一つは第１編第８章「労働の賃金について」で、キングの名を「ダヴィナント博士がその政治算術についての熟練を激賞したグレゴリ・キング氏」[33]と挙げた場合。もう一つが、第５編第２章第２節の租税論で、内国消費税の変更に対するダヴィナントの反対には根拠がないと批判した場合[34]。いずれにおいても、スミス自身は人名を挙げただけで、文献名はキャナンが考証しているが、キャナンの注記がなくとも、ダヴィナント著作集全５巻[35]があり、それがアダムスミス文庫ASLに含まれていることから、比較的容易に考証できる。キングを褒めたのは第２巻に含まれる「一国民を貿易収支で獲得者にする方法に関する試論」、内国消費税変更に反対したのは、第１巻に含まれる「公的収入諸論」中の第４「租税を課すことは公益に役立たないか」においてである。

だがこのいずれもペティに直接言及しているわけではない。ダヴィナントがペティに言及したのは、著作集第１巻に含まれる、「公的収入並びにイングランドの貿易に関する諸論」中の第１「収入および貿易に関する全ての諸考察における政治算術の効用について」という論文においてである。

ダヴィナントの政治算術論は「政治算術は政府に関する事柄を数値によって合理的に捕える技術を意味する」という有名な定義を含む。続けて「この技術それ自体は疑いもなく古代からのものであるが、政府収入および貿易という特定の目的への適用はサー・ウィリ

アム・ペティが最初に行なったものであり、これへの追随者は極めて少なかった。彼は最初にこの名をつけた。そして規則と方法を齎した。もし彼が現代まで生きていれば、彼の優れた機知はそれを広汎に広げたであろう。彼の巧妙な手腕は、必要な操作素材を収集し近年この王国で課せられるようになった各種の新税を整えただろうからである」[36]と、ペティに対する絶賛を述べる。この部分は冒頭近くにあり、しかもペティの名はその後も二度繰り返される。そして欄外註には、『政治算術』の書名も挙げられている。因にこの著作集には第5巻末尾に全巻を通した索引があり、これはペティの名を正確に指示しているほか、キングの名も、Arithmetick Politicalの見出しも含む。

スミスはダヴィナントの政治算術に関するこの論文を本当に読まなかったのだろうか？ここを読んだという確証は見出せないが、著作集は手持ち本であり、そこから他の箇所を二ヶ所、キャナンの考証まで含めれば計四ヶ所引用している。索引があることも含めて、読んでないと想定することは、フランス百科全書の「政治算術」の場合以上に不自然なのである。

親友ヒューム(1711～1776)の著作のうち、『イングランドの歴史』[37]，『人間本性論』[38]，『道徳、政治、文学試論集』[39]を探って見た。『国富論』でヒュームを名指しあるいはそれと判るように挙げた箇所でのヒュームの見解を代表する著書で、書名はキャナンの考証によるが、アダムスミス文庫ASLに含まれるものであって、スミスに強い影響を与えた文献と思われる。ところがこれには、完全精査したわけではないにしても、ペティの名はおよそ見出せそうにない。ペティは後世，哲学者扱いされていなかったのかも知れない。とすれば哲学者と自己同定していたスミスがペティを軽視したこともありそうに思える。

だが他にもスミスが読んだことが確実な文献がある。例えばカンティロンの『商業試論』[40]。スミスはカンティロンの名前だけ一度挙げている[41]。ところがキャナンの考証によれば、『国富論』には『商業試論』との共通性を想定して良い箇所が他に10はある。いずれも、大なり小なり、実際にカンティロンが下敷きになっていると見て良い。ところで『商業試論』は、ペティの名を3回挙げ、その説を議論の対象にしていた。アダムスミス文庫ASLに含まれる、比較的小さな本であることもあり、こういう箇所をスミスが見落としたとは考え難い。

因にペティは、フランスでは結構注目された存在だったようである。数学者ダランベー

ル（1717～1783）が実質的編集者だった百科全書しかり、カンティロンしかり。さらにペティのロンドンの人口推計（『政治算術別論』の実質的部分）は、出るとまもなく，1683年のJournal des scavants誌[42]で紹介されている。数学好きだった18世紀のフランスではそうしたことがあっても不思議ではなかろうが、それなら経済学にペティの影響はなかったのか。筆者はフィジオクラート史の知識が極めて乏しいので、継承関係については何とも言いようがないのだが、それでもフィジオクラートの純生産物Produit netの概念が、ペティのNet Proceedの概念の逆行的矮小化であることくらいはすぐ判る[43]。仮にフィジオクラート達が意識的にペティを継承していたとしたら、訪仏によって彼らと接触したスミスは口頭でペティの名を教えられなかったろうか？

もう一つ、スチュアート『経済学原理』[44]がある。スミスが明らかにこの書を読みながら『国富論』の中で意図的に書名を隠したことは、後の節でまとめて述べる通りだが、当面注目すべきは、スチュアートが、文献利用上の制約から孫引きにしたとは言え、ペティの名を都合４回は挙げていたことである。スミスはスチュアートを無視したことで、ペティが現れる経路の一つを塞いだことになる。

さて、筆者相応に不徹底な資料操作だったが、それでもこのくらい検討すれば、スミスのペティ無視が、単なる不注意のせいでもなく怠慢のせいでもないことはかなり確実に見えて来る。そもそもスミスが、名前は確実に知っていたペティの学問的業績を全く見落とすほど不注意だったとは考え難いし、ペティの著書に無関心のまま二作目の自著を書き上げるほど怠慢だったとも考え難い。理由は不明だが意図的な無視があったのではないか。それもいささか手の込んだ無視が。なお二つのキーワードに即して探索を続ける。

４．政治算術

『国富論』には「政治算術」なる語は二度だけ出てくる。一つは前掲の、ダヴィナントが政治算術におけるキングの手腕を褒めたと言う箇所で、この場合は政治算術なる用語については、少なくとも価値中立的に述べている。自らがキングの挙げた数値を確かなものとして使うために、ダヴィナントがキングの政治算術の手腕を褒めたと言うのだから、むしろ政治算術に多少なりと意義があるものと認めていると言って良い。問題はもう一方の用例である。

第4編第5章「奨励金について」の末尾に近いところで「私は政治算術をあまり信用していない。そこで私はこれらの計算のどちらについても、正確さを保証しようとは思わない」[45]という文が出てくる。これがいささかならず唐突な印象を与える。

第一に、『国富論』でこれまで「政治算術」の語を使ったのは、ずっと以前の第1編第8章だけであり、そこではむしろ好意的に扱っていた。ところがここに来ていきなり不信を突きつけた。第二に、直前で引用しているのは穀物の輸入依存度、輸出依存度に関わる数値で、その典拠は、キャナンの考証によればチャールズ・スミス『穀物貿易および穀物条令に関する三論』[46]であるが、アダム・スミスは同じ章の初めの部分では、同書から輸出依存度の数値を引きながら、チャールズ・スミス（1713～1777）について「穀物貿易にかんする諸論文のひじょうに事情に通じた著者」[47]と激賞しており、全巻で同書に都合4回依拠している。数値の算出についてここまで信用していた著者を引きながら、いきなりその人物の概算を捕えて政治算術一般に不信を示したのである。第三に、大きな文脈から言うと、ここは重商主義政策批判の一環として、穀物輸出奨励金を非難する箇所であって、第4編第9章の重農主義学派論のように理論的検討を主とする箇所ではなく、いわんや政治算術なる手法を論じたり排撃したりする場所ではない。

したがってここは単に論理的に唐突と言う以上に、何か心理的な屈折の表出ではないかと疑いたくなるのである[48]。それが何であるかまでは筆者の能力では解明できないが、前節で触れた、フランス百科全書無視やダヴィナンのト政治算術論文無視も、まさに「政治算術」と関わっていたことには、改めて留意しておくべきであろう。因にスミス自ら付した索引には、政治経済学」が丹念に拾われているのと極度に対照的に、「政治算術」は全く出て来ない。

政治算術不信の部分に注目したのがシュムペーターであった。彼は言う。

「…しかし＜ペティ＞の人を鼓舞するようなメッセージや示唆に富むプログラムは、かのスコットランド人の教授＜アダムスミス＞の堅苦しい筆致の中に枯れ凋んでしまって、50年の間大多数の経済学者には殆ど看過されてきたのである。アダムスミスが政治算術には大した信頼を置かないと宣言した時、彼はその性分に従ってただ大事をとっていたに過ぎなかった」[49]。

実は、筆者が本稿の主題であるスミスのペティ無視を改めて意識したのは、シュムペー

ターのこの文に接したからであり、その意味では学恩ある一文なのだが、だからと言って、これをこのまま拳々服膺すれば済むものではない。これ自身、シュムペーター流の慎重で持って回った文章だから、まず極めて単線的に解釈すれば、「スミスはその細心で繊細な性分から、政治算術の荒っぽさに不信を抱いており、数値が厳密でないことに注意したに過ぎないが、それが客観的にはその後50年間、経済学者達にペティを無視させる結果となった」となるであろう。主観的には慎重を期した注意書きが、客観的には興味ある先学ペティを歴史から消すことになった、と。とはいえ果たしてそう解したので良いか。

既述の考察から解かるように、そもそもスミスの文は、主観的に善意の注意書きとは解し難い。チャールズ・スミスの出した同じ数値に対して、先には「ひじょうに事情に通じた」などと褒めておきながら、ここでは、「私は政治算術を信用していないから、正確であることを保証しない」と、まるで突き放した評価を加えている。それは政治算術を貶めるための割り込み発言だったのではないか。そしてその「政治算術」がペティに由来することを、スミスは先刻ご承知だったはずである。だからシュムペーターが指摘したように、スミスの権威によって、ペティは実際に一時、経済学の表から消されたのである。

リカード（1772～1821）が，自らはあれほど共通性のある労働価値説を唱えながらペティに一切触れなかったのは明らかにスミスのペティ消去の効果であり、おそらくそのリカードの権威によって、J·S・ミル（1806～1873）やジェヴォンズ（1835～1882）までは、経済理論家達はペティに言及する必要を感じなかったのである。学説史家マカロックだけがペティとリカードの共通性を繰り返し指摘したが、素直にペティの名を挙げていたのは、外国人であるブランキ、ガニール、そしてマカロックの影響明らかなロッシャー（1817～1894）であり、マルクス（1818～1883）は早くからペティに注目していながら、マカロック軽視のせいで、ペティが労働価値説の元祖であることには『剰余価値学説史』になってようやく気づいた[50]。その後の碩学マーシャル（1842～1924）が、ようやくペティの経済学的貢献を認知したのである[51]。

さて、スミスが「政治算術」を知っていたろうことについて、もう一つ資料を挙げておく。ロスによる詳細な『アダム・スミス伝』[52]である。グラースゴウにフアウルズ印刷所が設立され、スミスはそれに親身の関心を持っていたが、この印刷所からいくつかの経済学の古典が刊行された。1750年にジョン・ローの『貨幣と貿易』、ジョシュア・ジーの『大

ブリテンの貿易と航海の考察』、1751年にサー・ウィリアム・ペティの『政治算術』、サー・ジョサイヤ・チャイルドの『貿易論』、1755年にトーマス・マンの『外国貿易の財宝』などである。スミスがそれらを見たことは疑いあるまい。そして全てもしくは主要ないくつかは入手したであろう。実際、ロー、ジー、チャイルド、マンの本はいずれもアダムスミス文庫ASLに含まれる。ペティの本だけが含まれないのが、逆に不思議なのである。スミスが「政治算術」を信用していなかったせいか？あっるいは彼は、何らかの理由によって政治算術に偏見を抱き、食わず嫌いでもしていたのだろうか？

これだけ並べれば、スミスが政治算術の用語や概念や、それが社会統計分析であることやペティに発することや、ペティやダヴィナントに「政治算術」の題がつく著作があることやを、全く知らなかったと言い抜けることは甚だ難しくなるであろう。おそらくスミスは政治算術を承知の上で、深入りすることなく頭から消去し、『国富論』からは念を入れて消去したのである。

最大限スミスに好意的に解釈するとして、考え得ることは、スミスがペティに比べると数値感覚がやや劣るために、統計的な大勢の把握、筆者のいうメノコメトリクスを行ない得ず、それによる結果を頭から不信の目で見ていたことである。数値については逆に厳密な計算結果だけしか信用せず、それゆえペティの文章に多少接しても思考に定着しないために、他の著作を探索しようとする意欲が湧かなかったのではないか。そうとでも解さなければ、スミスは自らの創意性を誇るために先人の功績を巧妙に抹殺した、とんだ悪徳漢だと言うことにさえなる。

5．政治経済学―ポリティカル・エコノミ―

本稿の主題からすれば、この語はさほど穿鑿しなくとも良い。ただスミス自身はこの語を案外重視していた節があり、そのことを踏まえた上で、スミスの先行者が誰であったかを探って見るのも無駄ではないように思われる。

本格的に行なうのであれば、語源・語義史を探らねばならない。ただそれは不完全ながら既に試みたことがあり[53]、ここではギリシャ・ラテンの語源はひとまず省略して、OEDによって、英語のPolitical œconomyがフランス語のœconomie Politiqueに由来し、それを近代イギリスの経済学者が英語化した。古い順に、スチュアート『経済学原理』の書名・ス

ミスの『国富論』における用例・マカロック『経済学原理』における定義になる、という認識から出発したい。

だが実は、フランス語のœconomie　politiqueの捕え方のほうにも多少の問題が残っていた。通説的には、この語を最初に使用したのはモンクレチアンの『経済学概論』[54]であり、その語義はルソーに至まるで変わらなかったとも言われる[55]が、それがいささか疑わしいのである。

そもそもモンクレチアンの本が発行される数年前にこの語の使用例[56]があり、それは統治学あるいは政治学の意味であった。これに比べれば、モンクレチアンの書は明らかに経済学に傾斜している[57]。そこから一世紀半も後でルソーがフランス百科全書に寄稿したŒconomie　Politiqueは、財政へのわずかな言及を除けば経済の要素を含まない統治学[58]である。不思議なことに、ルソーと同時代のフィジオクラートは、この語を殆ど使いっていないらしい。筆者が知る限りで、デュポン・ドゥ・ヌムールが社会一覧図の表題[59]に使っているが、これには経済と政治双方がいわば同格に含まれている上に、この図が現れたのはスチュアートの『経済学原理』の出版より後であった[60]。この語はフランス語では普通政治学であり、モンクレチアンの用法だけが経済学の方へ食み出ていた。

これを踏まえてイギリスに目を移すと、管見の限りで、英語でPolitical　Economyなる語を使った最初はペティである。土地の生産物価値からそこで働く人民の労賃を引いて土地の自然的価値に行き着く。「このことは政治経済学Political Œconomiesにおけるもっとも重要な問題、すなわち、あらゆるものの価値を、いずれか一方のみによって表現するために、どのようにして土地と労働とのあいだに等価・均等の関係をつくりあげるかという問題へと導く」[61]と。このポリティカル・エコノミーズは明らかにに経済、端的には価値論の意味である。『租税貢納論』における穀物と銀の換算関係、投下労働価値説を意味する語と言っても良い。類似語としてペティはその書で、政治学や経済学Politicks and Œconomicksという語も使っている[62]が、こちらは文脈から見て語源的なPolitical Œconomyの言い換えかも知れない。因にペティはコレージュ・ド・カンでモンクレチアンの半世紀ほど後輩に当たる[63]から、宗教紛争によって惨殺された有能な先輩の本の書名あるいは中身が頭にあったとしても不思議はない。

この後ペティの用例が継承されたか否かは、筆者には解からない。スチュアートの読書

歴が判れば、彼はスミスと違ってペティの名を繰り返し挙げている[64]から、継承関係を示し得るが、そこまでの知識はない。だがスチュアートはPolitical œconomyの語義を明示して使ってっていた。

そもそも彼の書名は、An Inquiry into the Principles of Political œconomyであり、副題に「人口、農業、商業、産業、貨幣、鑄貨、利子、流通、銀行、為替、公債および租税」とある。これはどう見ても今日の経済学の分野であり、スミス『国富論』の対象領域を纏めて先取りしたものと言って良い。

しかも同書第一篇冒頭に「緒論」があり、それは「Œconomyとは、一般的にいって一家のあらゆる欲望を、慎重にまた質素に、まかなう術である」[65]と始まるが、途中にœconomyとgouvernmentとは二つの異なった理念をあらわし」と区別した上で「一家にとってœconomyにあたるものが、一国にとってはPolitical œconomyである」とギリシャ以来の用語法に敬意を表した上で、自らのポリティカル・エコノミーを明確に定義していた。

さてその上で、スミスのPolitical œconomyの用法を見る。スミスは『国富論』第三版で索引をつけるが、それに、この語に関して参照箇所を計11示している。語としてPolitical œconomyと組み合せせた場合は４つか５つに限られるが、「この体系」とか「この政策」と同義語で表現した場合も拾っており、書き手としてそれだけ重視していたことを示している。後にキャナンは律儀に用語を拾って12箇所を追加した。筆者は以前に用例が極度に少ないと錯覚した[66]ことがあったがとんだ誤りで、実はこの語はスミス自身にとって、根本的なキーワードだったのである。

ところがスミスの用法は案外安定していない。そもそもこの「政治経済学」を書名に使っても良いのに全く使おうとしなかったが、そればかりかこの語を明示的に定義していない。そのため邦訳でも訳者は苦心して、文脈によって「経済学」としたり「経済政策」としたりしている。

代表的な用法を二つ取り上げておく。最も目に付くのは第４編の題「経済学の諸体系について」及び同編の序論である。この編は重商主義と重農主義を扱っており、編題の「ポリティカル・エコノミー」は経済政策とも経済学とも訳せる。実質的には重商主義論は政策批判であって、批判の手段として経済理論的認識が使われているが、最後の章である重農主義論はむしろ経済理論内在的批判であるから、いずれの訳にせよ誤りではないが完全

でもない。ただ「ポリティカル」を機械的に「政治」と訳すと日本語では問題が残る。もとがギリシャのポリスのことだから、「社会」経済でも「国家」経済でも差し支えないのである。おまけに、現在ではEconomicsが純粋理論経済、Political Economyが幅広い社会的経済と解されているものの、Economicsを造語して両語を対比したマーシャルの場合には、語義は広狭逆であった[67]ことに注意しておく必要がある。

さて、この編の序論は、経済学は二つの違った目標を目指すと言い、「第一に、民衆の豊富な収入または生活資料を供給すること、つまり、もっと適切にいえば、民衆がみずからそのような収入または生活資料を調達できるようにすること、そして第二に、公務を行なうのにたりるだけの収入を、国家または公共社会に供給することがそれである。経済学は民衆と主権者との双方を富ますことをめざしている」[68]と言い換えている。いうまでもなく、ここの「経済学」は「経済政策」と言い換え得る。もともと両者は区別されていないのである。ただ、後世の目からは「経済政策」の方が適切であろう。

もう一つの代表的用例に「この学派は極めて多数の著作があるが、ポリティカル・エコノミーすなわち諸国民の富の性質と原因を扱うばかりでなく、市民政府の全ての他部門をも扱う」[69]という表現がある。この学派とはフィジオクラートのことであり、「ポリティカル・エコノミー」は訳語としてはこの際「経済学」とした方が適切だが、ここで注意すべきは、そのことよりもむしろ「ポリティカル・エコノミー」がそのまま「諸国民の富の性質と原因」に等置されていることである。つまり、スミスが書名にしても良かった語が、スミスが実際に書名にした語と等置されているのである。このことは、後にもう一度問題にする。

さて、スミスのポリティカル・エコノミーは誰に由来するのであろうか。推測するしかないが、ペティの可能性を全否定までは出来ないにしても、おそらくそうではなかろう。スミスの徹底したペティ無視は別としても、ペティのポリティカル・エコノミーは価値—交換価値に関わっていたのに、スミスのそれは富つまり使用価値の集積に関わっている。それに、スミスの叙述が抽象的な体系を描いているのに対して、ペティは具体的構造的な対象の総括である。仮にスミスが十分ペティを学んだ上で素直にペティに依拠したとしても、ペティの用語法をそのまま借用するには抵抗があったのではないか。

それではルソーのエコノミー・ポリティークはどうか。OEDのフランス語→英語説を

採ると，ありそうなことに思えるし、ルソーとスミスの関係、ことにかつての日本で市民社会派が強調した政治思想的関係を重視すれば、さらにありそうなことに思える。しかし、残念ながらそうはなるまい。ルソーは経済抜きの統治を意味していたし、スミスは、語義的には曖昧なところを残しながらも、ペティ、スチュアートと並んで今日の経済、富に関わる語として使っていた。のみならず、『国富論』にはルソーの直接的影響は見られない。こういうところに詳しい現行の標準版「国富論」の註[70]にさえ、『人間不平等起源論』が希薄な関係を持つ文献として挙げられているにとどまる。

一番ありそうなのがスチュアートの影響である。そもそも書名が、『経済学諸原理の考察』に対して『諸国民の富の性質と原因に関する考察』である。スミスは明らかにスチュアートの韻を踏んでいた。しかも先に見たように、スミス自ら、「経済学すなわち諸国民の富の性質と原因」と言い換えていた。スミスの意識の中では、『国富論』は『経済学原理』の言い換えに他ならない。次節に見る明白なスチュアート隠しに照らせば、これはスミスの対抗意識の露骨な表現である。

6．スチュアート隠し

『国富論』にはジェームズ・チュアートは全く出てこない。人名も書名もない。この点でも筆者の前稿を訂正しておく必要がある[71]。さて、たった九年前に先行した類書のことである。挙げないこと自体が極度に不自然である。ペティがない以上に不自然である。だがスミスは、ここではとうとう尻尾を出していた。1772年９月３日付けの、W.Pulteney宛ての手紙[72]においてである。

肝心なところだけ訳出しておけば：—

お手持ちのサー・ジェームズ・スチュアートの本については、私は貴方と同じ意見を持っています。自慢めいて恐縮ですが、私はそれに一度も言及することなしに、その書にある理論の誤りを、私の本で明白に論破しておきました。（この後に、まもなく『国富論』の印刷が始まる趣旨の文がある。）

この手紙は、珍しくスミスの本音丸出しである。おそらく彼は、経済学の体系的叙述においてスチュアートに先を越されたことに我慢ならなかったのである。スミスは自分でも経済学を模索していた。『グラースゴー大学講義』[73]は、明らかに『道徳感情論』から『国

富論』へ移行する経過点を示している。だがそれは法学が直接の主題になっているだけに、経済学の構想の展開は制約されている。その後でスミスはフランスを旅行し、フィジオクラートと接触して啓発された。帰国後二・三年で、スチュアートの本が出版された。それがスミスの構想していた経済学を基本的には先取りしていた。内的に歪んだところのあるスミスは、実は小さからぬ衝撃を受けながら、これを先行業績と認めたくなかった。だから、著者名も書名も一切挙げずに事実上の批判をするという、姑息で陰険な対応に出た。ここからペティ無視へ遡行することは容易であろう。それはスチュアート無視より遙に気楽に行ない得た。スミスがペティ説のどこまでを知っていたかは、もはやさほど重要な問題ではない。彼は不愉快な先行説を表向き黙殺出来る心性と能力を併せ備えていた。スチュアートほど直前の先行者さえ無視し得るとしたら、一世紀前の存在で、当時の知名度が遙に劣ったであろうペティを隠蔽するのは遙に容易になる。

多くの証拠がスミスによる意図的なペティ隠蔽を指している。この推理自体に誤りはあるまい。ただ、あらゆる証拠は状況証拠である。スミスにとって幸運なことに、最後の物的証拠が今のところ見出せない。　　～4月15日

註

(1) 参照、馬場宏二『もう一つの経済学』2005年御茶ノ水書房、第12章「ペティ経済学の継承」。特に同278ページ註(2)の一覧表を見よ。

(2) W.L.Bevan, *Sir William Petty*, 1894, American Economic Association vol.,Ⅸ No. 4.（一橋大学図書館所蔵）PP. 99～102

(3) シュムペーター　東畑精一訳『経済分析の歴史』全7巻、1955～1972年　岩波書店

(4) Tony Asmromourgos, *On the Origins of Classical Economics*, London and New York, Routledge, 1996

(5) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776.

(6) Hiroshi Mizuta ed., *Adam Smith Library Catalogue*, Oxford, 1998. 通常ASLと略称

(7) E.C.Mossmer, I.S.Ross ed., *Correspondence of Adam Smith*, 1977

(8) ペティの著作は*The collected Works of Sir William Petty*, Routledge, 1997にほぼ纏められているが、他にも遺稿が大量にある。本文で挙げたのは代表的な三つの経済書で、いずれも松川七郎訳で岩波文庫に含まれている。

(9) 松川七郎「ウィリアム・ペティとその手稿」『中央評論』139号、1977年3月、79ページ。なおこの訪問記は、『政治算術別論』の訳者鈴木信之氏のご教示によって見出すことが出来た。

(10) 以下、本稿で利用した各版に触れておく。古い版は東京大学経済学部図書館所蔵「アダムスミス文庫」に含まれる。第2版までは大型本、第3版から今日の通常型となり、ここで索引が付く。第5版までがスミス存命中の版。以後プレイフェア版、ブキャナン版、マカロック版、ウェークフィエルド版と続くが、決定的

に変わったのが1904年のキャナン版である。小見出し、編者註、索引補充が加わり、一挙に充実した。これが長い間標準版になっていたが、筆者手持ちはそのペーパーバックである。その後1976年に、キャンベル・スキナー・トッドの編集によるオクスフォード版が現れ、1979年に小修正があった。キャナン版の成果やスミス蔵書目録等も吸収し、グラースゴー刊「アダムスミス著作書簡集」の一環とされているから、これが現在の標準版であろう。筆者手持ちはその写真複製1981年版ペーパーバックである。邦訳としては、大内兵衛・松川七郎訳の岩波文庫『諸国民の富』がキャナン版の忠実律儀な翻訳。水田洋監訳・杉山忠平訳の岩波文庫『国富論』が、原書第5版を基礎にその後の各版の成果をかなり吸収し、行き届いた訳文を示すが、どういうわけか事項索引がスミス索引やキャナン索引の邦訳でなく独自に作られていて、キーワードである富、政治算術、政治経済学のいずれも含まず、最も基礎的な事柄の検索の役に立たない。

(11) 上掲1784年第3版索引に奇妙な乱丁があったので、そこは同文庫1789年第5版と照合した。

(12) Adam Smith, ed. by Edwinn Cannan, *The Wealth of Nations*, University Paperbacks, published by Methuen & co. , 1961、前掲、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫

(13) 大内・松川訳前掲『諸国民の富』Ⅰ—234ページ。

(14) 大内・松川訳前掲『諸国民の富』Ⅱ—270ページ

(15) 邦訳では、この書は前掲松川訳『租税貢納論』に含まれている。

(16) この小冊子の考察として、馬場宏二、前掲『もう一つの経済学』第9章「ペティの聖書人口学」を見よ。邦訳は、鈴木信之訳「政治算術別論」法政大学大学院『経済学年誌』No.20　1983年。

(17) Benjamin Franklin, *Observations concerning the Increase of Mankind*, Peopling of countries etc., 1751, in Syth ed., *the Writings of Benjamin Franklin*, vol.3.

(18) I.S.ロス、篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』2000年、シュプリンガー・フェアラーク東京、286～291ページ

(19) *Considerations upon East-India trade*, 1701, A.and J.Churchill. 同書については、熊谷次郎「ヘンリー・マーティンの重商主義」『桃山学院大学経営論集』42巻4号、2001年3月：馬場宏二『マルクス経済学の活き方』2003年御茶ノ水書房第14章「『資本論』の一文献」：馬場宏二前掲『もう一つの経済学』第5章「ヘンリー・マーチンの経済学」：馬場宏二「マーチン“変説”の探究」大東文化大学『経済論集』No.85, 2005年7月参照。

(20) マカロックの、いくつかある同趣旨の発言中、代表的なのは、J.R.McCulloch, *The Literature of Political Economy, London*, 1845, pp.99～103であろう。

(21) マルクス『資本論』国民文庫版、Ⅲ—51ページ。因にマルクス『経済学批判』第一章最長の註におけるペティ分業論評価も参照せよ。

(22) 久保芳和「『東印度貿易に関する諸考察』にあらはれた匿名者の経済思想」大阪商大『経済学雑誌』21巻4/5号、1946年11月、74ページ

(23) 以下、索引に「富」を含まない水田・杉山訳『国富論』の、巻・ページだけ挙げておく。すなわち、Ⅰ—22, 63, 419, 431, ：Ⅱ—132, 133, 295, 297。

(24) 同様に、Ⅰ—22, 419, 431, ：Ⅱ—132, 133, 295,

(25) 前掲松川七郎訳『租税貢納論』119ページ

(26) 水田・杉山訳『国富論』Ⅱ—295ページ

(27) 前掲松川七郎訳『政治算術』50ページ

(28) *Encyclopedie ou Dictionnaire raisonnée des Sciences etc*. 1755、馬場前掲『もう一つの経済学』第4章「“社会科

学”を遡行する」はこの百科全書について多少の情報を提供するであろう。

(29) アダム・スミスの会監修『アダム・スミス哲学論集』1993年、名古屋大学出版会、319ページ以下。

(30) Henry Home (Lord Kames), *Sketches of the History of Man*, 2 vols, 1774. 同書はアダム・スミス文庫ASLに含まれる。

(31) 大内・松川訳『書国民の富』Ⅳ—243, 288, 352. 390ページ

(32) 筆者が参照し得たのは、Lord Kames, *op. cit.*の1778年第2版、Routledge Thoemmes Reprint, 1993（東大美学研究室所蔵）である。

(33) 水田・杉山訳、前掲『国富論』Ⅰ—140ページ

(34) 水田・杉山訳『国富論』Ⅳ—257ページ

(35) *The Political and Commercial works of that celebrated writer Charles D'Avenant LLD*, …, Collected and revised by Charles Whitworth, 5 vols, London, 1771, 一橋大学メンガー文庫蔵

(36) *op.cit.*, vol., 1, p. 128.

(37) David Hume, *The History of England from the Invasion of Julius Caesar to the Revolution in 1688*, 1773 ed. 8 vols.

(38) D.Hume, *Treaties of Human Nature*.

(39) D.Hume, *Essays of Moral, Political and Literature*,

(40) R.カンティロン、津田内匠訳『商業試論』、1992年、名古屋大学出版会

(41) 第1編第8章。水田・杉山訳、前掲『国富論』Ⅰ—124ページ。

(42) *Journal des Sçavants*, pour l'annee M.DC.L ＸＸＸⅢ、因に同誌は1665年創刊で、雑誌というものの始祖とされている。

(43) 馬場前掲『もう一つの経済学』249ページ

(44) Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Œconomy*, London, 1767. 中野正訳『経済学原理』、岩波文庫

(45) 前掲水田・杉山訳『国富論』Ⅲ—66～67ページ

(46) Charles Smith, *Three tracts on the Corn Trade and Corn Laws*, London, 1766

(47) 前掲水田・杉山訳『国富論』Ⅲ—15ページ

(48) 小麦価格に関して「この種のことについての知識で有名な人であるグレゴリ・キング氏」と、「政治算術」の語を回避した文章もある。同1—342ページ

(49) シュムペーター、東畑訳、前掲『経済分析の歴史』2—439ページ

(50) この件については、前掲馬場宏二『もう一つの経済学』第12章参照

(51) アルフレッド・マーシャル、馬場啓之助訳『経済学原理』、1890年版　東洋経済新報社

(52) I.S. ロス、前掲『アダム・スミス伝』、158ページ

(53) 馬場宏二前掲『もう一つの経済学』第3章「経済という言葉」

(54) Antoyne de Montchretien, *Traicte de l' œconomy Politique*, Rouen, 1615 l'edition de Paris 1889, Geneve Slakine Reprint (avec Introduction par Funck-Brentano) 1970

(55) シャルル・ジイド、シャルル・リスト、宮川貞一郎訳『経済学史』1936年東京堂（原書初版1909年、邦訳底本1923年、同書本文冒頭

(56) 用例はlouis de mayenne-Turquet, *Monarchie Aristocratique*, 1611にある由。参照James E.King, The Origin of Term "POLITICAL ŒCONOMY" in *The Journal of Modern History*, vol. ＸＸ, No. 3, Sept. 1948.

(57) 実は筆者には17世紀初頭のフランス語は読みこなせないが、製造業、商業、航海、王の義務と範例、という構成は明らかに経済中心である。メンガーはこれを実践的経済学と呼び（『経済学の方法に関する研究』岩波文庫38ページ)、シュムペーターも、モンクレチアンは理論的にはお話にならないほど低いのにエコノミー・ポリティークと書いたばかりに有名になった（前掲『経済分析の歴史』1, 39, 369ページ）とひどく辛い評価をしているものの、経済学に含めている。

(58) J.J.Rousseau, discours sur L'œconomie Politique dans *Encyclopedie, op. cit*., 1755坂上孝訳「政治経済論」白水社『ルソー全集』1979年、白水社

(59) Du Pont de Neumeurs, *Abrége des Principes de L'Economie Politique*, 1772, Eugene Daire intro. *Physiocrates Tom. 2.* 1846, : *Table raisonnée des principes d'economie politique*, 1773, *Ouvres de du pont de Neumeures*,1848ed., T. 3.構図はかなり異なるが、どちらにせよ、法、政治、法・経済、文化を包括した社会一覧図である。経済に決定的に傾斜しているわけではない。

(60) Jean Poef ed., *Dictionnaire Sciences Economique*, 1958では、Economie Politiqueの起源として、モンクレチアンの後スチュアートが1770年に書名に使い、デユポンが1773年に表題に使ったと、そうとう荒っぽい説明をしている。なお、以上３点の文献は吉原泰助氏のご教示による。

(61) ペティ、前掲松川訳『アイアランドの政治的解剖』133ページ。但し訳文を少し訂正した。

(62) ペティ前掲松川訳『租税貢納論』、105ページ

(63) モンクレチアンは、フンク＝ブレンターノによると1590年ころには*College de Caen*で学んだことになる。Montchretien, *op. cit.,* p.Ⅴ、ペティは、松川七郎『ウィリアム・ペティ』1967年岩波書店58ページによると、1637～39年ころに、同じCollege de Caenで学んでいる。

(64) スチュアート、前掲中野訳『経済学原理』Ⅰ—128, 206, 226ページ

(65) 同上、69～75ページ

(66) 参照、馬場宏二前掲『もう一つの経済学』68ページ、註（20－a)

(67) 同上書、19、63～65ページ参照

(68) 水田・杉山訳前掲『国富論』Ⅱ—257～258ページ

(69) 同上訳『国富論』Ⅲ—325ページ

(70) 標準版は*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Oxford U. P., 1976. ここではその写真版ペーパーバックであるLiberty Fund edition,　1981, に拠る。同書P. 689.

(71) 馬場前掲『もう一つの経済学』61ページ。スミスはスチュアートの名を挙げていない。挙げているかに述べたのは、キャナンの編者註の見誤りであった。

(72) *Correcepondence of Adam Smith, op. cit*., p. 164.

(73) アダム・スミス、高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』1947年日本評論社。因に『国富論』中心部分の原形に当るのがその第２部第２篇であり、『国富論』第５編の財政論に当る部分が第３部第４部である。

追記； 脱稿後一カ月経ってやっと気付いたことだが、『国富論』という書名は、スチュアートの書名を下敷きにして、これにフィジオクラートの思考を取り込んだ合成品ではないかと考えられる。スチュアートの『経済学原理』は*An Inquiry into the Principles of*

*Political Œconomy*であり、これとスミスの*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*は、原語で見ると相当共通している。内容的には同じ主題のものだから、意識的に似せたかも知れない。だがスミスは、対抗意識があるからそっくり同じにはせず、特にスチュアートの創案らしく響くPolitical Œconomyを避けた。彼が好意を寄せていたフィジオクラートがŒconomie politiqueを使っていないことが、回避を容易にしたであろう。そして代わりに、スミスは諸国民の富の研究となる語を持ち込んだ。本文中のフィジオクラートを論じた章で、政治経済学は諸国民の富の性格と原因の研究だと言い換えていた。スチュアートのすぐ後、チュルゴーが『富の形成と分配の考察』*Réflexions sur la formation et la distribution des richess*を書いた。スミスがそれを英訳したという説もあるくらいだから、その影響は大きかったであろう。索引でpolitical œconomyを神経質に拾っているのだから、スミスは決してこの語を軽視したのではない。絶えず気にしながら、スチュアートへの対抗意識から素直に書名には使えずにいた。フィジオクラートが回避・代置両面を容易にしてくれたおかげで、独自の外見を持つ書名が出来たのである。

——この説は、スミスを神格化しなければ誰でも考え付くことである。とっくの昔に誰かが唱えているかも知れない。これまでなかったとすれば、この説を成立させない資料がどこかに存在するのかも知れない。どちらも知らないシロウトだから、恐いもの知らずで一言述べておいた。　　5月27日